

MATSUNAGA HEADLINE NEWS



2009 Vol.6

TAKE FREE

発行元：株式会社 松永建設
 発行人：松永大祐
 〒339-0043
 埼玉県さいたま市
 岩槻区城南五丁目6番6号
 TEL：048-798-1751 (代)
 FAX：048-798-0075
 【HPアドレス】
<http://www.matsunaga.gr.jp>

松永建設の土木工事が優良表彰を受賞!

表彰4冠達成!

この秋、松永建設では、国土交通省、UR都市機構、及びさいたま市から、優良な土木工事現場に贈られる4つの賞を受賞しました。この栄誉を受け、各担当者の喜びの声をここにお伝えします。

後列左から、
 松永大祐社長、
 土木部 松山敏彦部長
 前列右から、
 土木部 三浦政則部長代理
 土木部工事課 埴 和博課長
 土木部工事課 田中吉朗主任
 土木部工事課 鍋川原伸之主任



松永建設は、特に優良な土木工事に対して授与される賞を4現場で受賞し、表彰をいただきました。一時に4現場での受賞は、誠に光栄の至りです。

今回の受賞現場に共通しているのは、通常の入札方式ではなく「総合評価落札方式」だったこと。まず土木部を代表して松山敏彦部長に、その意義を聞きました。「技術提案や施工計画まで含めた総合的な評価によって落札が決まった現場ばかりなんです。技術というハード面、そしてサービスの提供や顧客への配慮というソフト面が共に認められた、意義深い受賞だと自負しています」

鍋川原伸之主任は、岩槻区内の水道管布設替工事で受賞しました。

「交通量の多い主要道路だったので、工事水準の維持と共に、安全対策を第一に考えました。渋滞回避のための情報をラジオで呼びかける、道路規制があることを遠方からもわかるよう工夫を凝らす等が評価されたのだと思います。近隣店舗にも最大限の配慮をして、苦情が1件もなかったのは嬉しかったですね」

三浦政則工事課長(当時)の現場は、越谷レイクタウン南側地区の造成工事。約226.5ha(東京ドーム約50個分)という、広大な都市計画事業の一翼を担い

ました。

「大手ゼネコン各社が居並ぶ大事業でしたので、心がけたのは、対応や処理をとにかく素早く、ということ。大手にも勝る対応力は、好評価のポイントになったと聞いています。また、地元企業のフットワークの良さを最大限に活かして、期間中に発生した追加工事を次々と請け負えたことも大きかったようです」

さいたま市岩槻区江川の調整池矢板工事で受賞したのは田中吉朗主任。近隣住宅に施工上の配慮が必要な工事だったそうです。

「周辺地盤への影響を把握するため、日々の動態観測がかかせませんでした。現場を3分割に締切り、地盤をできる限り安定させるよう努めた点が良かったと思います。また定点カメラによる全社的的施工管理を行ったことも評価対象となりました」

そして4人目、埴和博課長の現場は三

郷市の江戸川築堤工事。盛土用に3万㎡もの土を方々から集めたという苦心の工事だったそうですが、埴課長は今回で三度目の受賞ということで、そこには計り知れない努力があるはずですよ。

「常に意識しているのは、こまめでスピーディなレスポンスですね。あと今回、振動と騒音の数値を表示する電光掲示板の設置も提案・実施しました。対外的なアピールの意味も当然ありますが、音や振動を極力少なくしようと、私たち現場側がいい緊張感を持って仕事に臨めた、という効果まで生み出しました」

4件の受賞のポイントを総合すると、やはり「創意と工夫にあふれる仕事」と、「顧客満足度アップを心がける姿勢」ということに尽きるようです。今回の表彰受賞4冠は、常日頃から当社が掲げるこの2点を社員全員が改めて心に刻み、さらなる前進を期するいい機会となることでしょう。



▲「第4回さいたま市優秀建設工事業者表彰式」での表彰風景

たてもの
最前線

小中学校に始まり、今後は大型施設、一般住宅へ

松永建設が手がけた、最新耐震補強の事例をピックアップ

耐震補強で、命を守る。



「やはり学校の夏休みに工事が集中するので、手際の良さや過去のノウハウは必須。経験者をどんどん増やしていています」(建築部 島中部長)



埼玉県三郷市立
彦糸中学校

「校長室を補強するにあたっては、ブレースに化粧が施されています。無骨な感じが少しでも薄らぐようにという配慮ですね」(東主任)



子どもたちの未来を安全なものに——。埼玉県下では現在、続々と学校施設の耐震補強工事が進められています。松永建設で受注した工事を例に、耐震補強とはどのような工事なのかを見てみましょう。

校舎の安全性を高める耐震補強工事は、子どもたちの未来を守るため、また、学校が災害時避難場所に指定されることが多い、という側面から見て、大切な事業です。松永建設では数多くの耐震補強工事を手がけていますが、その工事とはどんなものなのでしょうか？

「耐震補強工事の核となるのは、構造計算上、ここが弱いという部分(おもに壁)を解体し、補強材を組み込む作業ですね」と建築部の島中宏毅部長。このブレースと呼ばれる補強材は、四角い枠組とV字が組み合わされた、鉄骨製の頑強な構造になっています。写真で見ると、弱点部分にはめ込む、まさに頑丈な鉄のブロックという感じ。ブレースは、施工する校舎がどの程度の強度を必要とするかによって、大きさも形も異なるのです。

ブレースがそうした特殊なものであるがゆえに、工事がスムーズに進まないことも度々あるそうで、「発注は早くいただければ早くいただけるほどありがたい」というのが耐震補強工事関係者の共通の願いなのだとか。というのも、補強度合いに合わせて個々に作られるブレースは、当然ながら工事決定後に作ることにしているのです。生徒たちが校舎を使用しない夏休みに集中して工事を行わなければならないため、発注が遅ればブレースの完成も遅れ、お盆明けから突貫工事というケースもあるといいます。

そうした困難があっても、施工を終えたときには充足感でいっぱいだと、建築部の工事担当者が口をそろえるのは、やはり「耐震」という安全を守る工事だからでしょう。

「先生方や児童たちの喜ぶ顔を見るのがいちばんです。耐震補強と並行して教室や廊下などの補修・改修を行うことも多いので、目に見えて校舎がきれいになるとやっぱり嬉しいものですから」(建築部・工事グループ 伊藤賢太主任)

「職員室のすぐ隣が作業場でしたので、ホコリを立てないための気遣いは、非常に感謝されました」(同・東正行主任)

「浄水場と校舎を過去に手がけた経験を活かし、築40年の屋内運動場の補強を担当しました。屋内運動場といえば大空間。足場の設置や安全性確保には苦労しましたが、入念な準備の甲斐あって順調に進みました」(同・宮坂綱二主任)

学校から公共施設、商業ビル、そして各一般住宅へ——。「備えあれば憂いなし」でさらに耐震診断・工事が進むであろう今後、当社もより一層の尽力を惜しみません。みなさんも今一度、身の回りの耐震を見直してみたいはいかがでしょうか？

埼玉県春日部市立 豊春中学校 屋内運動場
「百数十平方メートルもある屋内運動場の屋根を、極力はがす部分を少なくするために知恵を絞りました。築40年には見えない仕上がりになったと思います」(宮坂主任)

埼玉県さいたま市立
城北小学校

「手がけたのは児童数が千人というマンモス校だったので、工事の進行については緊張の連続でした。校舎が安全できれいになって、今ごろ喜んでくれているといいですね」(伊藤主任)



こちら
現場です

最新工法で環境と人にやさしい工事を

大量の土砂の掘削と、大きな作業音……下水管敷設工事の現場では、従来のイメージを完全に払拭する最先端の工法が、いま積極的に取り入れられています。環境土木部による、人と地球に配慮した「エコな工事」をのぞいてみましょう。

上尾市にある下水管敷設工事現場へ赴くと、地表が「掘られていない」ことにまず驚きます。通常、下水管を通す区間といえば、アスファルトが剥がされ、深く掘り起こされている……そんな光景を想像しがちですが、様子はまったく違っていました。掘ってあるのは、付設工事の始点と終点の2カ所のみ。それも直径1.5mほどの縦穴です。

この始点と終点に立坑を空け、「小口径管推進機」で土中を真横に掘って敷設

を行う最新の「スピーダー工法」(下のコラム参照)を用いているのが、この現場。「端から見ると下水管工事には見えませんから、よく一般の方に『何の工事?』と尋ねられますよ」と笑顔で語る、環境土木部の石田真一係長。立坑の中をのぞくと、底にはでん! と重量感のある機械が1台鎮座し、作業員の操縦により油圧でゆっくりと下水管を真横に押し込んでいます。「これも何気ない作業に思えますが、2トンもの圧力で推進しているんですよ」(石田係長)

敷設までには3つの過程があります。最初は、始点と終点を結ぶ、ガイドとなるべき直線を掘り進むリード管敷設作業。直径5~6cmで先端に発光体がついています。その光を真横からチェック、方向修正しながら掘ります。その誤差、なんと1~2cm! 経験がモノを言う熟練の技です。2過程目は、いわば「本掘り」。ダミーの下水管にスクリーを内装し、その先端から水を噴射、土を軟化させ、リード管をぴったりとたどりながら掘削します。その工程で管内部が痛むた

地中を掘り進むから、騒音と廃棄物が最小限

21-1 公共(補)工事汚水管渠築造工事

め、最後はダミーの下水管をところ天のように押し出しながら、本物の管を推進させる、というわけです。

しかし、なぜ「見えない土中」を掘り進むような、困難に思える工法をあえてとるのでしょか? 環境土木部の関根勝己部長によれば「やはり環境重視、ですね」とのこと。「最小限の掘削で済むので、廃棄アスファルトや廃土砂が非常に少なく、絶対に騒音も抑えられます。近隣住民の生活も邪魔せず、交通規制もほ

んの一部で済みますから」なるほど! さすが「環境土木部」の面目躍如たる仕事ぶり。「暮らしと環境にやさしいこの最新工法を求めて、当社に依頼されることも多いですね。もうひとつ積極的に進めている廃材や廃アスファルトのリサイクル事業と共に、我が社の自慢です」と関根部長も誇らしげでした。最新の工法と蓄積された環境のためのノウハウは、今後ますます大きな意義を持つことでしょう。



「昔からの工法に比べて、ある一定の深さになると劇的に作業効率は良くなりますし、環境には絶対的にやさしいです」と環境土木部 関根部長

▶直径1.5mのスリムな立坑の底に、機械を設置。クレーンで1つ1つ下水管を下ろしていき、油圧で長さ1.0mくらいの管を押し込む作業を繰り返します。地中を正確に掘り進むには、経験と腕が頼り!



▲現場の風景。ここが始点で、終点にも同じく立坑が掘られています

▼「この工法も、以前はもっと少しずつしか掘り進められなかったんです。土木技術の日進月歩を実感しますね」と環境土木部 石田係長



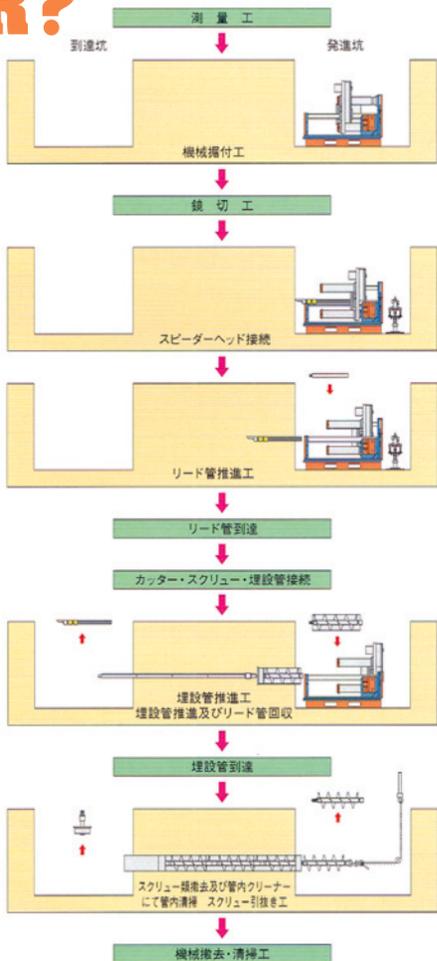
What's SPEEDER?

◎スピーダー工法、その仕組みと手順

右の図は、スピーダー工法の図解。まずリード管で基準となる横穴を掘り、次にスクリー内装ダミー管で地中を掘り進みながら、リード管を押し出します。最後は本物の管を挿入。関根部長いわく「リード管は1時間あたり10~12mの進み具合で、次の工程はグッとスピードは落ちます。土を掘ってかき出しながらなので5~6m/時くらいでしょうか」



▲作業が終わると機械をクレーンで吊り上げてトラックに乗せ、また他の立坑へと移動し、設置します



太陽光発電システム 設置レポート!

太陽光発電でクリーンエネルギー生活を始めましょう

屋根の上を有効活用! 降り注ぐ日差しが大切な家庭のエネルギーに!

▼設置が完了した太陽光パネル。施工は1日で終了します



▲屋根の上にパネルを運び、安全に配慮しながら設置していきます



◀設置工事のたびに太陽の恵みと環境の大切さを実感しますとABホーム工事部 中村浩二グループリーダー



この度、太陽光発電システムを導入していただいたのは、さいたま市岩槻区にお住まいのA様邸。A様は環境への意識が非常に高く、地球と家計にやさしい太陽光発電にいち早く着目されていたことが、今回の設置につながりました。

導入したシステムは、3.8kw発電の太陽光パネルに、容量370ℓのタンクを備えるエコキュート、そしてIHクッキングヒーターという組み合わせのオール電化標準タイプ。弊社担当のABホーム工事部・中村グループリーダーから

設置の様子を聞いてみましょう。

「実際の工事の前に、事前に現場検分を行いました。屋根の寸法を計測し、設置予定のパネルの大きさととの擦り合わせをするほか、足場の検討、屋根の材質やオール電化のための配線具合の確認などをするのが目的です。また、導入後の光熱費等のシミュレーションも欠かせません。導入してから『思ったほど節約にならなかった』ではもったいないですからね」

以上を経て、いよいよ実際の設置へ。

事前の段取りさえきちんと行っておけば工事自体はそう困難なものではありません。A様邸の場合も、朝の8時には作業を開始して、7時間ほどで完了。

「まだ設置して間もないので、節約や効率に関してはさほど実感できていませんが、やはり屋根を見上げてパネルを確認したり、室内の液晶表示を見たりすると(現在の発電量や状態、売電料金などが刻々と表示される)、ああ、導入したんだなあと新鮮な喜びが湧いてきます。あと、オール電化で火事の

心配がほほいらなくなったというのは、なんだかホッとしますね」

そう語ってくださった施主のA様。そうなんです、太陽光発電システムとは日々の「節電を積み上げる」こと。これからじっくりと、効果のほどを確かめていただければと願っております。

設置工事はもちろん、事前準備やアフターケアまで責任を持つ松永建設の太陽光発電システム。「さいたま市のすべての屋根に太陽光発電を!」をキャッチフレーズに、今後も普及に邁進します。



岩槻まつりは大盛況! 松永建設ブースへのご来場、ありがとうございました!

8月23日に行われた「岩槻まつり」。第2まつりプラザの松永建設グループ・ブースは、大勢の人出で賑わいました。実物のソーラーパネルが目玉の太陽光発電や、オール電化の展示コーナー、介護についての相談を『うらら岩槻』がお受けするコーナーなど、種々の催しが盛況でしたが、なかでも行列の

絶えなかったのが地震体験車。未知の揺れ=震度6は多くの方々にとって貴重な体験だったと思います。また、耐震工法を見ていただくために建てられた家の骨組みも、存在感たっぷり。ストラックアウトやパターゴルフに挑戦、賞品をゲットして大喜びのお子さんもいっぱい、笑顔あふれる1日となりました。

社長の男気コラム

自転車イベントに初出場! それは距離と自分への挑戦!

皆さんは最近、何か新しいことにチャレンジをしましたか? 今期の我が社のスローガンは「Challenge! One more challenge!!」。ところが己を振り返ってみると、やはり忙しく仕事をこなすのが精一杯の日々……。これではいけないと思っていた矢先、ふと目にした雑誌に自転車イベントの記事が! それは「センチュリーライド」という、160キロもの長距離を自転車で走る有名なイベントを紹介したもので、それを見たときに「これだ!」と思い立ちました。マウンテンバイクにちょっと乗った程度の経験しかない私が、いきなり100キロを超える自転車のイベントに出場——まさにこれは「チャレンジ」です。

さっそく知り合いの自転車乗りと相談してみると、160キロのイベントは日頃のライドとはまったく次元が違うとのこ

と。私の闘志は燃えました。それが8月の末のことで、イベントは9月末。やると決めたらとことん早い私、ものすごい速度で勉強し、自転車を買って、ヒマをみつければ自転車に乗り何10キロと走りました。短いながらも準備をきっちりしてイベントに出場! そのイベントで自分に課した掟は、補給所以外では絶対自転車を降りない、押さないということ。心臓破りの坂は「漕いだまま倒れるか!?!」と思うぐらい過酷なものでしたが、そこはかろうじて根性で! その甲斐あって、辛いけれど、辛さを乗り越えた人間にしかわからない楽園を見ることができたのです。

こうして自転車に乗っているうちに気がついたことがあります。自転車目線で初めてわかる道の勾配、街並みなど、車で走っていたのでは気づかないものがたくさん見えてきたのです。「地形」という

ものが実感できる、お店や空き地、さまざまなものが見えてくる。これは思いがけず仕事にもプラスになった嬉しい収穫です。

チャレンジしたからこそ、向こう側が見えてくる——いまではむしろキツイ坂を漕ぐことに喜びを感じるほど。身体を使う、街を見る、そんな楽しさを教えてくれる自転車と出会えたことに、感謝をおぼえる今日この頃です。

